授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2717 号

Computed tomography findings of paranasal sinuses in patients with eosinophilic granulomatosis with polyangiitis: comparison with other eosinophilic sinus diseases and clinical relevance of their severity

好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の患者における副鼻腔ＣＴ所見：他疾患との比較と重症度による臨床的関連

岩田 真紀（いわた まき）

博士（医学）

論文内容の要旨

好酸球性多発血管炎性肉芽腫症(以下　EGPA)における副鼻腔病変は、診断基準や生命予後不良因子の項目にも含まれている代表的な臓器病変のひとつであるが、これまで十分な研究がなされてこなかった。特に、EGPA の副鼻腔病変のＣＴ所見が好酸球性副鼻腔炎(以下 ECRS)の特徴と類似しているかどうかは議論の的となっている。本研究の目的は、EGPA 患者の副鼻腔 CT 所見を、ECRS を含む他の好酸球性副鼻腔疾患との比較を行うことと、副鼻腔病変の重症度による臨床的な関連を明らかにすることである。

本研究では、治療介入前の EGPA 患者（n=30）の副鼻腔 CT 所見を Lund-Mackay スコアリングシステム（LMS）で評価し、3 つの対照疾患患者（N-SAIDs 不耐喘息（N-ERD）(n=30)、アスピリン耐性喘息（n=21)、喘息を伴わない好酸球性慢性副鼻腔炎（ECRS）(n=28)）と比較検討を行った。その結果、EGPA の LMS の合計スコアは、N-ERD(p<0.001) と ECRS(p=0.042)のスコアと比較して有意に低く、1 点から 23 点まで大きなばらつきを認め、副鼻腔病変の不均一性がある可能性が示唆された。また、LMS スコアの低い EGPA 症例群では、生命予後不良因子の Five-Factor Score≧2(p for trend=0.019)および心病変(p=0.024)を有する割合が有意に高く、LMS スコアの低い EGPA 症例の疾患予後が悪い可能性を示唆している結果であった。特に、LMS のスコアが 4.0 点以下であれば、予後不良因子として考慮する必要がある可能性が示唆された(感度 50%, 特異度 83%)。